

意見

天竜川の保全の新しい展望

— 「天竜川天然資源再生連絡会」は何を目指すのか? —

秋山雄司<sup>1)</sup>・喜多村雄一<sup>2)</sup>・村上哲生<sup>3)</sup>

**A new perspective for the Tenryu River conservation: The goal of “Fisheries Resources Research and Conservation Board of the Tenryu River”, a council composed of fishermen’s union, administrator of dams and river researchers**

Yuji AKIYAMA<sup>1)</sup>, Yuichi KITAMURA<sup>2)</sup> and Tetuo MURAKAMI<sup>3)</sup>

(2012年11月2日受付; 2013年1月24日受理)

はじめに

天竜川のアユ漁は、危機的な段階に至っている。最盛期、1979年は27,000枚にも達した年券(年間入漁証)の売上は、2010年には、その1/10以下の2,500枚まで落ち込んでいる。長期的な入漁者減少傾向は、川での遊漁に対する若い世代の志向の変化などの社会的な要因も否定できないが、ダムによる河川環境変化がその最も重要な理由であると考えられる(上村, 2004)。例えば、ダムによる濁りの長期化は、直接にまた餌となる付着藻類の生産の阻害を通じて間接的にアユの成長に影響を及ぼす。さらに、遊漁者が最も好む友釣りも、濁りによりアユが餌を目視できず、追わなくなり、漁自体が成り立たなくなる。

アユ漁の危機は、それに依存する漁協の経営を圧迫するだけではない。漁協は、独占的な漁業権を得る代償に、水産資源を再生産する責務を負う。これは単に有用魚種の放流事業だけに止まるわけではなく、資源の再生産の場である河川環境を維持し、後代に伝える業務も含む。内水面漁業の衰退は、川の常駐的な管理者を失うことを意味する。

天竜川漁協は、その状態を手をこまねいて見ていたわけではない。独自の調査を実施し(天竜川漁業協同組合・たかはし河川生物調査事務所, 2009; 井口他, 2010)、河川やダムの管理者と改善のための協議を続けてきた。また、本来の天竜

川の魅力と現在の変貌を漁業者以外の住民に説明することも試みた(「天竜川漁協」ホームページ)。さらに、2006年より、同様な問題を抱える物部川漁協(高知県)、矢作川漁協(愛知県)と連携し、3次にわたる「天然アユを増やすと決めた漁協のシンポジウム」を開催してきた。この活動は、1995年頃からの物部川漁協の活動が契機となり(高橋・東, 2006)、3漁協と協力関係が深いアユ研究者・高橋勇夫の尽力で実現されたものである。

我々は、それらの活動をさらに強化するための新たな共同作業の枠組みを提案する。漁業者とダム管理者の関係は、従来、親密なものとは言えなかった。両者は、川の管理を巡って対立的な立場であった。また河川環境保全の研究者も、両者とは距離を置いてきた。むしろ利害関係者との連携は、研究やそれに基づく提言の中立性を損なうものと考えられていた。しかし、天竜川の危機に際し、三者は、それぞれの立場から互いに手を組む必要性を強く感じるようになってきた。

2011年、天竜川漁協とダム管理者である電源開発株式会社(J-Power)は、河川やアユの研究者を加え「天竜川天然資源再生連絡会」(以下「連絡会」)を発足させた。三者は何を目指すのかを紹介する。

<sup>1)</sup> 〒431-3422 浜松市天竜区米沢 273-1 天竜川漁業協同組合, Tenryu River Fishermen’s Union, 273-1 Minasawa, Tenryu-ku, Hamamatsu, 431-3422, Japan

<sup>2)</sup> 〒104-8165 東京都中央区銀座 6-15-1 電源開発株式会社, Electric Power Development Co., Ltd., 15-1 Ginza 6-chome, Chuo-ku, Tokyo, 104-8165, Japan

<sup>3)</sup> 〒467-8160 名古屋市瑞穂区汐路町 3-40 名古屋女子大学, Nagoya Women’s University, 1-16 Shioji-cho, Mizuho-ku, Nagoya, 467-8610, Japan (連絡著者 村上哲生 E-mail: murakami@nagoya-wu.ac.jp)

## 天竜川天然資源再生連絡会の目指すこと

川の保全と利用を巡る対立は、議論のための実証的な資料を欠く場合に調整が困難なものとなる。天竜川の場合、争点の一つは、ダムのもたらした環境変化であるが、ダムの運用と遊漁者の減少の関連については、因果の連鎖が解明されているわけではなく、いわば間接証拠があるにすぎない。ダムによる利益を採るか、手付かずの自然の保護かの二者択一であれば、また、損益の差が歴然とあれば、蓋然判断の段階でも、選択は可能であろう。しかし、環境問題の多くがそうであるように、損益は計量化されておらず、対象とする地域や時間の設定により変化する。合意は、不満があるとしても両者が折り合える折衷案でしか得ることができない。

本連絡会は、研究者、ダム管理者、漁協の三者の役割を固定化したものとして分担し、相互の調整を図るだけの組織ではない。調査や、その成果に基づく啓発活動や河川環境改善のための提言活動は三者が共同して取り組むべき課題である。当面、調査活動を主とし、1) 天竜川で何が起きているか、2) その現象はダム運用と因果関係があるのか、3) どのような改善策が可能かについて検討する予定である。3) の対策については、原理的には、現状の容認も、またダム撤去を含む過去の環境への復帰もあり得るが、1)、2) の議論が進まない状況での目標設定は実りの無いものとなる。結論は、調査と議論なしでの現状理解と改善策の追認に終わるかもしれない。課題はあまりにも大きく、現在の我々が採り得る技術的、制度的な改善策は限定的なものに止まっている。しかし、真摯に協議することは、今後の施策の実現を保障する助けとなろう。自らが関与し、合意した施策については、実現のためのより強い責任が伴うためである。

もちろん、現状で合意可能な改善策は、積極的に実施する。河床の耕耘による産卵環境の改善などの事業は、既に着手されている。またダム下流への土砂供給についての新たな提案が「連絡会」では議論されている。

## 多様な主体の参加と公開された議論の保障

天竜川の将来は、内水面水産業のみの立場で決定できるわけではない。当面、「連絡会」の議論は、漁協とダム管理者の現状認識の違いの確認から始めるが、法の上での河川管理者、流域自治体や住民などの多様な主体の参加も呼び掛ける。河川を集水域と海とを結ぶ経路と考えれば、天竜川上流の住民や海の漁民との連携も不可欠であろう。研究者の参加も、自然科学分野だけではなく、社会・人文系の分野との交流も必要となる。各々の主体の利害はそれぞれ異なるし、調整も難航するに違いない。しかし、友好的な雰囲気の中での率直な意見の交換は必ずや実を結ぶと信じる。

「連絡会」での議論の過程は、全て公開する。「連絡会」は、

新たなホームページを設けた（「まるっと天竜川を知る」ホームページ）。当初は、天竜川の現状や会議の情報を伝達するのみの機能しか備えていないが、将来は双方向の意見の交換を可能にする予定である。外部の批判を封じた議論は、視野の狭いものになりがちである。ただし、我々の「連絡会」は発足したばかりであり、会の運営や河川環境の改善に関する全ての提案を直ちに受け入れる態勢とはなっていない。早急の対応にはつながらないかもしれないが、提案を聞き捨てることはない。専門的立場で、また川の保全の必要性を強く感じる流域内外の住民としての意見、提案を歓迎する。

## 文 献

- 井口明・矢高弘記・服部典子・村上哲生（2010）：天竜川下流（静岡県）の透視度と栄養塩負荷の変動．陸の水，**43**：1-6.
- 高橋勇夫・東健作（2006）：ここまでわかったアユの本．築地書館，東京．
- 天竜川漁業協同組合・たかはし河川生物調査事務所（2009）：平成18-20年度天竜川アユ資源保全調査報告書．天竜川漁業協同組合・たかはし河川生物調査事務所．
- 上村信夫（2004）：最近の天竜川の濁りについて．はまな，**506**：2-7.
- 「まるっと天竜川を知る」ホームページ：<http://www.tenryugawa.jp>  
2013年1月20日閲覧
- 「天竜川漁協」ホームページ：<http://www3.ocn.ne.jp/~tenryu-r/>  
2012年10月21日閲覧  
（担当編集委員：田代喬，名古屋大学大学院環境学研究科）